

私がふと思いついたクロスやらを短編で書く

内臓マグナム

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

どうも皆さん初めまして。内臓マグナムと申します。

ここは私が適当に思いついたクロスものやらオリ主ものなどいろいろを短編でお送りするところです。ここでは長いのを書く気はございません。

ここはネタを投稿して誰かこんなのを書いてくれないかなーと作者がwktkしながら書いたものがあります。

こんなのより俺が面白く書いてやるよ！って方。どんどんお願いします！何故なら私が読みたいか（ry

# 目次

アムロ・レイ×篠ノ之束	1
ハイスクールD×D??クトウルフ	7

## アムロ・レイ×篠ノ之束

篠ノ之束、ISを生み出した天才である彼女は今世界から姿を眩ませて移動式ラボでのんびりとコーヒーを飲んでいた。モニターに映るのは綺麗な森とその森の中を駆ける動物たち。だが彼女はその光景を見ても何も感じない。くだらない世界にあるくだらない景色程度にしか思っていない。しかし彼女が森の中にあつたとある物を見た時、彼女は目を見開き飲んでいたコーヒーのマグカップを落としてしまう。

「なに……あれ……？クーちゃん！ラボをちよつと降ろして！」

森の中にあつたのは20メートル以上ある巨大な鋼の巨人だった。色は白と黒をベースにされ左肩にはなにかのマークが描いてある。束は一目散に鋼の巨人の元へと駆け出すとその巨人を調べ始める。

「すごい……！これ触ってみただけでわかる……！この金属はこの地球でまだ作られたことのない特殊な合金だ……！これ……もつと知りたい……！」

彼女はパソコンを呼び出すと巨人に接続して凄まじい速さでキーボードを打ち込みハッキングを開始する。

「コレの名前はレガンダム？装甲はガンダリウム合金、出力は2980kw、推力97800kg……アハ！何コレ！何コレ！」

キーボードを打ち込む彼女の顔は新しいおもちゃを手にした子供のように目を輝かせていた。未知なるモノとの遭遇、その未知なるモノは自分より優れた科学力を持っている。天才である彼女はこの巨人から目が離せずにした。

「知りたい……！もつと知りたい……！コレが何なのかもつと知りたい……！」

研究者としての知識欲が刺激され彼女はより一層早くキーボードを打ち込む。その中で彼女のモニターに巨人の中から生体反応がある事に気がつく。普段の彼女なら気にも止めないだろうがこの未知の巨人の中にいる生き物を一目見たい、この巨人のことを聞き出したという思いから彼女はキーボードを打ち込む。彼女が最後にエン

ターキーを押してコックピットの扉が開かれるとそこには投げ捨てられたヘルメットと操縦席で気絶している一人の男がいた。クセのある赤毛の髪をした20代くらいの男がいた。男は外見には怪我はなく健康そうだったが何か生命力といったモノを吸われたのだろうか酷く衰弱していた。

そんな様子の男をみて東は彼を背負うと自分のラボへと運んでいく。別に目の前で困ってる人がいるから助けたいという訳ではない。この巨人の事について聞きたいことがある。自分の知りたいという欲望に逆らわない結果、こうした方が良いと判断しただけである。彼女は自分にそう言い聞かせると、ラボにいるクロエに男の治療を任せると再び巨人の元へと走っていくのだった。

◆  
ハッキングを終え東はラボへと帰ると巨人に記憶された映像を映画を初めて見る子供のように期待を募らせ、モニターに映し出された映像をみる。

『レガンダム、行きます！』

「わあ……！」

そこには宇宙があった。彼女が夢を見、憧れていた宇宙があった。あの男は自分が憧れていた宇宙へ行った事のある男だった。そんな彼へ自分より先に宇宙へ行ったことのある嫉妬のようなモノを抱きつつ東はモニターに映る映像をみる。

「おおっ！すごいすごいスゴーイ!!」

モニターに映るのは沢山の鋼の巨人だった。そしてそこに映った緑の巨人たちはこのレガンダムから出されたであろうバルカンやビームで撃墜されて行く。そしてモニターから男の音声が聞こえる。

『敵意が無邪気すぎる。シヤアでもない、あの男でもない』

『子供に付き合っついていられるか！』

『邪気が来たか……！』

『やられる!?!』

モニターには先ほどの量産型の奴とは違う二機の機体が現れ、やられると思っただが突如として現れたバリアのようなモノにビームが防

がれ二機の内一機を撃墜してその場から離れていく。

そして舞台は変わり地球に向かう巨大な小惑星へと近づいていく、そこではリガンダムに乗っているアムロと呼ばれる男と赤い巨人に乗っているシヤアと呼ばれる男が戦っていた。

『船がある……なんだコレは……？そうか！シヤアめ！』

『シヤア！』

その闘いは凄まじいの一言でビットを展開し、撃ち合いをしつつ本機同士で斬り結んでいる。場面は変わり、シヤアと呼ばれる男は持っているビームトマホークを投擲してリガンダムの持つビームライフルを真つ二つにし、かと思えばリガンダムの方はバルーンを囿にしてそれをどかす隙を狙い相手のライフルを切り裂く。束はその光景から目が離せずに見ていた。

そして互いの武装が全て無くなり、鉄の拳による殴り合いが繰り広げられ決着はつく。何かに気を取られたシヤアにリガンダムが後ろから襲いかかり中から脱出用のポッドが出てくる。それを捕まえるのと先ほどとは違う、恐らくはシヤアと呼ばれる男の声が高笑いを上げていた。

『フフフフフ……はははははは！』

『何を笑ってるんだ!?!』

『私の勝ちだな。いま計算してみたがアクシズの後部は地球の引力に引かれて落ちる。貴様等の頑張り過ぎだ!』

『ふぎけるな！たかが石つころ一つ、ガンダムで押し出してやる!』

『バカなことはやめろ!』

『やってみなければ分かん!』

『正気か!?!』

『貴様ほど急ぎすぎもしなければ、人類に絶望もしちゃいない!』

『アクシズの落下は始まっているんだぞ!』

『リガンダムは伊達じゃない!』

無茶だ、と束は思った。シヤアと呼ばれる男の言う通りバカな事だ。正気の間人がやる事ではないと束は思った。既に落下が始まっ

ているあんなに巨大な小惑星を押し出すなんて不可能に決まってる。歩き出した像をアリ一匹で止めるようなものだ。だが、ガンダムに乗る男は声の様子から一切諦めておらず出力を全開にして懸命に小惑星を押し返そうとしていた。

懸命に小惑星を押し返そうとしている時、先ほどとは違う恐らく今まで見たものとは違う旧式であろう機体が小惑星に取り付き、ガンダムと一緒に押し返そうとしていた。

『やめてくれ！こんなことにつきあう必要はない！下がれっ！来るんじゃない！』

『ロンドベルだけにいい思いはさせませんよ！』

取り付いた機体に向かって悲痛な叫びを上げて止めようとする男、しかし取り付く機体は増えていき皆懸命に小惑星を押し返そうとしていた。無茶苦茶だアリが少し増えただけで像の歩みを止められる訳がない。それでも機体は増えていき、とうとう先ほどまで闘っていた敵の機体まで取り付いて押し返そうとしている。

『ギラドーガまで：！？ 無理だよ、みんな下がれ！』

『地球が駄目になるかならないかなんだ！やってみる価値ありますぜ！』

『しかし…爆装している機体だつてある…』

『駄目だ！摩擦熱とオーバードで自爆するだけだぞ！』

大気圏によるその熱と摩擦に耐えきれず次々と爆発していく。男は懸命に叫ぶ、こんなことに付き合いたくない。犠牲になるのは自分とシヤアだけでいいと、しかし機体に乗る男たちは軽口で返し小惑星から離れない。

『もういいんだ！みんなやめろオーーツ!!』

『結局…遅かれ早かれ、こんな悲しみだけが広がって、地球をおしつぶすのだ…ならば人類は、自分の手で自分を裁いて、自然に対し、地球に対して、贖罪しなければならん…アムロ……なんでこれが分からん……!』

懸命に叫ぶ男の一方でシヤアと呼ばれる男の声が聞こえてくる。

その声はどこか悲しくてきつと泣いているんだろう。シャアの言葉を聞いた時、束は自分とシャアがどこか似ている気がした。

きつとシャアも人類というものに絶望してしまったのだ。だからこんな事をして、地球を滅ぼして、人類を無理矢理宇宙に押し上げようとしたのだと。そしてアムロはシャアと違って人類に絶望していながらも全ての人類の可能性を信じて、いつか人類は絶望を乗り越えられると信じて、人類を、地球を守るために懸命に闘っているのだと束は感じた。モニターからはこれ以上は機体が危険だと警告音が鳴り響くが、ガンダムと他の機体たちはへばりつく。そして視界が緑の綺麗な光が包まれた。光は小惑星と小惑星に取り付く機体を包み機体達が跳ね飛ばされて行く。

『そうか……！しかしこの暖かさをもった人間が地球さえ破壊するんだ！それを分かるんだよアムロッ！』

『分かっているよ！だから、世界に人の心の光を見せなけりやならないんだろ！』

いくつかの口論の後、映像は途切れた。束は何も言わずにモニターの電源を切り、アムロが眠る部屋へと向かう。この光を見ても人類を信じきれないシャアとそれでも人類を信じるアムロ。二人の物語は終わった。束は絶望しながらも人類を信じて光を見せたアムロという男と話してみたと思った。宇宙について、あのガンダムについて、それも聞きたい。だけれど、それよりもアムロに聞きたいのだ。彼がどんな人生を歩んできたのか。なんであんな無茶苦茶なことをしたのか。人類が変われると本気で思っているのかと。そして自分の事も話して、彼は自分にどうという言葉を投げかけるのかと。

束はアムロの眠る部屋を空け、アムロが目覚めるのをじつと待つ。ニュータイプ……それはジオン・ズム・ダイクンが提唱した宇宙に適応した新たな人類。お互いに判り合い、理解し合い、戦争や争いから解放される新しい人類の姿。しかし宇宙世紀に住む人たちにおいてニュータイプというものはジオン・ズム・ダイクンが提唱したものと掛離れているだろう。

宇宙世紀においてニュータイプⅡ最強のパイロットという誤解を



生み出してしまったアムロ・レイが目覚めた時、新たな物語は動き出す。

## ハイスクールD×D??クトウルフ

俺阿見定治！好きなのは熟女！よろしくな！

さて、自己紹介も終わったし……そろそろ現実を見なきゃな……

「我が名を侮辱した罪は重いぞ！悶え苦しんで死ね！」

「どうすつかねコレ……」

いやさ、目の前で三十過ぎてそうなデブ&ハゲのおっさんがブチ切れてんのよ。あ、本人曰く墮天使だそうです。そのおっさんはお顔を真っ赤にして手を掲げてなんか光の槍を作ってるのよ。つまり何が言いたいかと言うと……

俺、死にそうです！

ん？何でおっさんキレてんのかって？

んー、さつきいきなりあのおっさんが現れて「アザゼル様の命令で貴様をこのデブウエルがしまつする！」って言ってきたからさ

「そんな……！その歳でキラキラネームだなんて！かわいそうに……」

って言ったのよ。同情100%で。そしたらさ……デブウエルがキレたんだ。俺怒らせたつもり無かったのに……。そんで今に至るんですよ。正直笑わなかった俺はまだ良い奴なんじゃないかなって思った。

話戻すけど俺殺されそうなんだけど、ただでやられるつもりは無いです。ちよつと生まれつきある能力を使います！

「深淵の門」

「な！貴様<sup>セイクリッドギア</sup>神 器を覚醒させてたのか!？」

セイクリッドギア？イタタタタツ!!心の古傷がメツチャ痛い!グリグリ来る!メツチャグリグリ来る!おっさん!おっさんの見た目でそれ言ったらアカンヤツやで!許されんのは中学二年生のイケメンくらいや!

アカン……!このままだと中学二年生の頃の古傷でやられる……!殺られる前にやらなアカン!

俺はルールブックを開きあるページを見つけ読み上げる。

「来いや！レンの蜘蛛来いや！」

「関西弁ヘタか！」

『おいすー』

俺がエセ関西弁で呼ぶと地中に暗闇ができ、そこから巨大な蜘蛛がヤケに軽い感じで現れる。あ、デブウエルさんツツコミありがとうございます。ごさいます。

さて、みなさん。ここで一つ質問があります。みなさんは蜘蛛をマジマジと観察した事がありますか？私はありません。ん？何が言いたいのかって？いやさみなさん目の前に自分よりはるかにデカイタランチュラみたいな蜘蛛出てきたらどう思う？キモいよね？嫌だよね？うん……もう限界かな……。

「K I M E E E E E E E !! オロロロロロロ!!」

『呼び出しといて!?!ていうかクツサ!?!キミのゲロクツサ!?!』

ごめんなさい……呼び出したのにいきなりゲロ吐いてごめんなさい……でも無理なの！生理的に無理なの！オロロロロロ(ro)ry

俺が吐いている一方でデブウエルさんはというと俺とレンの蜘蛛さんとのやり取りを見て頭の血管を浮かばせていた。

「貴様ア……う？ふざけるのも大概にしろよ……！蜘蛛を召喚したくらいで良い気になるなよ！その蜘蛛！このデブウエルが消してやる！」  
『うわ……その見た目でキラキラネームはかわいいそうに……』

すみませんレンの蜘蛛さん、そのやり取りさつきやったんすよ。あ、デブウエルさんにはレンの蜘蛛さんの声は聞こえないか。俺はルールブックのオート翻訳機能があるから聞こえるし話せるけど。

レンの蜘蛛さんの憐れみの声はデブウエルさんには当然届かなくデブウエルさんは光の槍をレンの蜘蛛さんに投擲する。レンの蜘蛛さんは憐れみの目で見てたので光の槍を避ける事は出来なく、レンの蜘蛛さんの脚に光の槍が突き刺さる。

『痛って!!』

ヤケに軽い声出してますねレンの蜘蛛さん。

『痛いわー。貫通で1D3くらい食らったわー。超イッテー』

いやアンタ耐久力27くらいあるじゃん。微微たる程度じゃんそ

れ。

『痛いなー！何すんだよこのヤロー！』

見える……俺にはレンの蜘蛛さんの頭に浮かぶやけにコメディチックなお怒りマークが見えるぞ……！ていうか本当に軽いなこのレンの蜘蛛さん。

レンの蜘蛛さんは怒りながらデブウエルさんに向かって糸を飛ばす。広範囲に降り注がれた糸はデブウエルさんに避ける暇すら与えずデブウエルさんは翼に糸が絡みつきデブウエルさんを飛べなくすると地面に落ちて身動きを取れなくする。

『もう何すんだよこのヤロー！お前なんか体液一つ残らず吸い尽くしてやるからな！覚悟しろよこのヤロー！』

『レンの蜘蛛さん、それデブウエルさんには聞こえてないっすよ』

『え!?マジで!?……まあいつか！定治くん、これ持って帰っていい?』

『あ、ハイ。どうぞ』

『ありがとね。それじゃ僕もう帰るね。アトラクⅡナクア様にご飯作らなきゃだから』

『ア、ハイ。お疲れ様でした』

『お疲れ〜』

そう言うとレンの蜘蛛さんはデブウエルさんを口で掴むと脚を振って呼び出した穴から何か喚いてるデブウエルさんと一緒に帰っていった。レンの蜘蛛さんが帰ると穴は閉じて後にはレンの蜘蛛さんが撒き散らしたネバネバネットだけが残っていった。さて……

『どうすつかね……コレ……』

俺はレンの蜘蛛さんが残したネバネバネットを眺めながらこう呟くのだった……。そしてこの時俺はまだ気づいていない。俺が後々いろんな事に巻き込まれて行く事に……。そして俺が今後呼び出していく神話生物の力オスつぷりに頭を悩ませる事に……。そして……

「え……何アレ……」

近くで俺の事をドン引きで見ていたリアス先輩の視線に。

あ、この後ネバネバネットは燃やしました。警察にバレなくて良かったです。公園だったけど火遊びは危ないからね。ちゃんと消火

しました。焼きマシユマロおいしかったです。